



障害から貰ったもの

愛媛県新居浜市 村上 通隆

私は歯科医師として働き盛りの47歳の時に脳出血を発症しました。幸運が重なり一命は取り留めましたが、利き手を含む右半身不随の障害が後遺症として残り、離職することになりました。与えられた「第二の命」と「障害」を併せ持つて踏み出した発症後10年目の抱負を記してみたいと思います。

私は平成6年、40歳までは愛媛大学医学部歯科口腔外科に勤務し、以降は愛媛労災病院に勤務していました。父は平成6年に他界し、独身の私は母と労災病院敷地内にある職員宿舎で暮らしていました。母は脳梗塞の後遺症で左半身不随の障害者でしたが元来明るい性格の人で、慎ましいながらも親子水入らずの日々を暮していました。

平穏な毎日が淡々と過ぎていきましたが、平成13年8月31日に母は転倒して歩行困難になり入院しました。歩行困難の原因は尾骨骨折で順調に回復していました。9月23日秋分の日、午前中は母の病室へ行き午後から職員宿舎に帰宅して自室で書類を整理していました。午後3時頃、手を休め椅子をリクライニン

グさせて横になった瞬間に頭の中でパッチンと鋭い音がしました。痛くも何とも無く「何の音だろう？」と思いました。右手が動かず身体全体も殆んど自由が利かないことが直ぐに解りました。症状は急激に進行し、朦朧とした意識の中で「これは脳出血だ！このままだと自分は死ぬな！」また「母が悲しむだろうな」と思いながら完全に意識を失いました。意識が戻ったのは3日後のICUベッドの上で次の様な経過でした。私が職員宿舎で意識を失っていた頃、歯牙破折を伴う口腔外傷の急患が労災病院救急部を受診した為、救急部のスタッフや同僚の先生達が私を探していて職員宿舎で倒れていた私を発見してくれたのです。急患が来院したので運良く早期に発見され迅速に脳出血の処置がされましたが、そうでなかったら死亡していたでしょう。非常に幸運だったのですが、歯科あるいは口腔外科を天職と思ってきた私にとって右手が使えないというのは致命的で、「全てを失ってしまった」という深い喪失感が私の心を支配していました。その後リハビリに励み、短い距離なら杖を

ついて歩けるようになりましたが右手の機能は回復せず、復職は叶わず平成16年6月23日に愛媛労災病院を退職しました。

復職するという目標を失って、退職後はただボンヤリと暮らしていました。私は学生時代からヨットを趣味にしていたのですが、そんな私を心配して友人がマリナーに誘ってくれました。マリナーへ行つて広々とした大好きな海を見ているだけでも気分転換になりました。施設内を散歩したり簡単な整備を手伝ったりしている間に身体も随分と元気になりました。そして発症後5年目の平成18年には初めてヨットに乗せてもらい、平成20年からは短時間のセーリングを楽しめるようになりました。障害者のセーリングは周囲の人達を驚かせ、中には私に感化？されセーリングに関心を示す障害を持つ人も現れました。

私は少し前向きに考えられるようになりましたが、発症前の医療職としての充実感には程遠いものでした。また「第二の命を有意義に生かしているのだろうか？」と常に反芻していました。そんな状況で平成22年5月連休明けに健診で労災病院を受診した時のことでした。杖をついて病院の廊下をトボトボ歩いていると80歳代の御婦人が「お兄ちゃん、足が悪いんじゃないね。ここにお座りなさい。」と声を掛けて下さり、横に座らせて頂きました。御婦人は一人暮らしの日常生活の様子を初対面の私に本当にざっくばらんに話してくださいました。私が健康で白衣を着て病院に勤務している状態だったら「この様に話して下

さったかな？」と考えた時、一つのこと気付きました。私が障害者であるが故に、相手の警戒心を取り除き安心感を与えているということ。このことから私は以前から関心があった傾聴ボランティアを思い立ちました。講習会を受講後ボランティア協会に入会し、平成23年1月から色々な施設を訪問して主に高齢者の傾聴をさせて頂いています。初対面の方とは自己紹介で私の「障害」が話題になり、それで相手の方が心を開いて下さりスムーズに傾聴に入れることがよくあります。また私の病気体験から、高齢者の心情に共感を持って傾聴させて頂くことも多々あります。

私は「第二の命」と共に「障害」も授かり、発症後には失った能力だけを見て喪失感に支配されていました。しかし好むと好まざるとにかかわらず、「障害」は私の新しい個性として私自身になっていて、その個性は悪い面ばかりでも無いのだという事を理解しました。私は今この新しい個性を敢えて愛し大切にしようと思いはじめます。何故なら、そうしないと折角授かった「第二の命」まで輝きを失って色褪せてしまいそうだからです。

第二の人生は「第二の命」に障害から貰った新しい個性を加え積極的に残りの人生を歩んでみたい、そして可能なら「僅かでも人の為に役立つようになりたい」と願っています。